

の中に隠された真実を探り出し、関連情報とつなぎ合わせ、分析・吟味そして何を真実として伝えたいか推測することである。本書に接した読者は、必ず推理のきっかけをつかみ、更には自らの経験を説話として伝承するかもしれない。

(高山真一郎)

[勉誠出版, 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-20-6, TEL. 03 (5215) 9021, 2008年12月, 菊判, 1,264頁, 9,800円+税]

安室芳樹 著

『切手で綴る医学の歴史』

著者は医師であり、日本医史学会会員、日本医学切手友の会副会長で、これまでに数多く医学切手について国内の切手展にも出品され、大銀賞、金銀賞、銀賞など6回に亘り受賞されている超ベテランの切手コレクターでもある。

今回の『切手で綴る医学の歴史』の刊行の意図するところは、古代エジプトから現代に至る医学、特にヨーロッパ医学の歴史を中心に医学の歩みを辿ることにある。もとより切手だけで医学の歴史を論じることは容易ではない。何故なら発行される医学の切手の主体は人物が多く、時代を生きた証人として歴史を語らせることになるからである。しかもその発行数は各国共に極端に少なく、その認識度も国によって違い、医学の歴史を語らせるには一貫性を欠く憾みがある。こうした観点から著者は、各章の項目を設定し、登場人物を暦年風にアレンジするのではなく医学の歴史を優先して切手をアレンジし、そしてまだ切手に描かれていない人物・事項のために、積極的に他の郵趣材料（消印、風景印、メータースタンプ、はがき、封筒）などを多用している。即ち、各ページには平均半ページを切手及び郵趣材料のレイアウトに使っているが、この試みは少ない切手のアレンジの活用に成功し、読者をして飽きさせない内容としている。最近ではフレーム切手、P切手と、ある程度は思うままの意匠で切手が作れるようになったので、より充実した『切手で綴る医学史』の刊行も夢ではなくなったように思う。

本書の構成は5章からなっていて、各項目は、最初に要旨が数行に纏められ、次に本論が解説され、切手の説明が下段に提示されている。示された切手、郵趣材料はすべて著者私蔵のものという。

目次順に示すと次の様である。

第1章；古代の医学

1. エジプト・メソポタミアの医学, 2. ギリシャ神話と伝説の医学, 3. ギリシャ医学, 4. アレキサンドリア医学, 5. ローマ医学.

第2章；中世の医学

1. キリスト教の興隆とビザンチン医学, 2. アラビア医学の盛衰, 3. 西ヨーロッパの医学, 4. ペスト・レプラの流行とロイヤル・タッチ, 5. 古代医学の復興とスコラ医学, 6. 外科と解剖の萌芽, 7. 大学の設立,

第3章；近代医学の誕生

1. ルネッサンスと医学, 2. 解剖学の勃興, 3. パラケルズスとパレ, 4. 血液循環原理の発見と顕微鏡の登場, 5. 医物理学派・医化学派と体系学派, 6. 実験医学と啓蒙運動, 7. 植物学と医学, 8. ジェンナーと種痘

第4章；近代医学の発達

1. フランス医学の栄光, 2. ドイツ医学の近代化, 3. イギリス医学の系譜, 4. 微生物学の勃興, 5. 細菌学から免疫学へ, 6. 近代外科の夜明け, 7. 化学の医学への応用, 8. 精神・神経医学の近代化, 9. ロシア医学のあゆみ, 10. アメリカ医学の動

向, 11. 日本の医学一近代化の流れの中で, 12. 公衆衛生学の成立

第5章; 現代の医学は次に詳述

各項目の記述は時代を捉え, 簡潔で要を得ている. 特に第5章の現代の医学では, 1. 物理学の医学への応用で, レントゲンによるX線発見からX線の医学への導入, 血管造影に至る放射線医学の発展, 放射線発見, 人工放射線と中性子, サイクロトロンとアイソトープ, 紫外線療法, 心電計と血圧計の発明, 脳波の発見, 超音波の応用, 位相差顕微鏡と電子顕微鏡, レーザーの応用, 核磁気共鳴断層撮影を, 2. 免疫血清学の開拓では, 抗血清・ワクチンの開発, 免疫学から血清学へ, 免疫生物学の登場を, 3. マラリア・黄熱と熱帯医学では, マラリア, 黄熱, トリパノゾーマ睡眠病, 熱帯病各種を論じている. 4. 人体の生理機能研究では, ホルモンの発見, 副腎ホルモンの単離, アセチルコリンの発見とその応用, 物質代謝と酵素, サイクリックAMPの発見, プロスタグランデインの発見, 細胞増殖因子の発見, コレステロール・胆汁酸・脂肪酸, 血管の生理, 耳と眼の生理, 大脳と神経の生理, イオンチャンネルの発見, ストレスと生理機能を, 5. ビタミンの発見では, 脚気-ビタミンB₁, 壊血病-ビタミンC, 夜盲症-ビタミンA, くる病-ビタミンD, ペラグラ-ナイアシン, 皮膚炎・血液凝固障害・悪性貧血につて, 6. インシュリンの発見, 7. 化学療法と抗生物質, 8. 外科手術法の開拓では各方面での外科手術の進歩に触れ, 麻酔法・手術法に及

び, 9. 神経医学・精神医学の動向では, 神経の構造と機能, 進行麻痺と脳炎, クロイツフェルト・ヤコブとプリオン病, フロイトと精神分析学に触れ, 10. 免疫学の展開では, 抗体産生とクローン選択説, リンパ球の機能, ハイブリドーマとモノクローナル抗体, 利根川進と抗体の多様性について述べ, 11. 遺伝学から遺伝子工学へでは, メンデルと遺伝の法則, 核酸の発見, 遺伝染色体説と人工的突然変異, 微生物の遺伝学への導入, 分子遺伝学の登場, DNAの構造解明, 遺伝子増幅と塩基置換, RNAの合成, RNAとDNAの塩基配列, モノーとオペロン説, 制限酵素の発見, 癌遺伝子研究が説かれている. 最後の12では現代医学の諸問題—癌およびウイルス研究として, クローン研究やヒトゲノム解析を巡る倫理的な問題, 現代の医学が抱える癌とウイルスの諸問題を取り上げ締めくくっている.

以上に付図, あとがき, 参考文献, 人名索引(総ページ302)で終わっている. 切手がカラーでないこと, 切手にスコット番号が入っていないことなど不便な点もあるが, 論述は歯切れよく印刷は鮮明だし郵趣材料も珍しいものが多く眼を楽しませてくれる. 現代に相応しい切手を介した医学史と言えよう.

(山之内卯一)

[出版文化社, 〒541-0056 大阪市中央区久太郎町3-4-30, 船場グランドビル8階, TEL. 06(4704)4700, 2008年10月, B5判, 304頁, 6,000円+税]

兵頭晶子 著

『精神病の日本近代——憑く心身から病む心身へ——』

著者は歴史学専攻の若き研究者である. 橋本明氏の率いる「近代日本精神医療史研究会」にも参画し, 日本近代における精神医療史研究を精力的に進めている. 本書は, 著者の過去10年間の研究成果の集大成である.

かつて狐憑きが当たり前だった時代があった. 著者は「本書のテーマ」を多様な言い方でくり返し述べているが, 「なぜ精神病という概念は, 近代に登場したさまざまなシステムを動かしうるのか. それは, 近代に特有のある権力が, 精神病と